

メッセージアウトライン

コリント人への手紙 第二13:1～10 「警告と願い」

[1-2]「私があなたがたのところへ行くのは、これで三度目です。すべての事実は、ふたりか三人の証人の口によって確認されるのです。私は二度目の滞在のときに前もって言っておいたのですが、こうして離れている今も、前から罪を犯している人たちとほかのすべての人たちに、あらかじめ言っておきます。今度そちらに行ったときには、容赦はしません」

ここではコリント人たちに対する警告のことばが述べられている。パウロはここで申命記19:15から引用して「すべての事実は、ふたりか三人の口によって確認される…」と言う。彼がコリント教会に行ったときに、その何人かの人々を証人として事実を確かめ、正しく裁くつもりなのである。彼は今までは愛の心をもって様々な罪や不品行の中にあるコリント教会の人々を悔い改めさせ、正しい信仰生活を送るようにと忍耐を重ねてきたが、それでも悔い改めない人々には厳しい態度をもって臨むつもりなのである。今、神はパウロを通して、そのことをなそうとされている。

[3]「こう言うのは、あなたがたはキリストが私によって語っておられるという証拠を求めているからです。キリストはあなたがたに対して弱くはなく、あなたがたの間にあって強い方です」

コリント教会のある人たちは、パウロが本当に神によって立てられた人物であるかを疑っていた。しかし彼らは神がパウロを通して力ある働きを行われたことを見て、そして経験していたはずである。→Ⅱコリント12:12 キリストはコリントにおいて弱く何もできないお方ではなくパウロという器を通して力強く働かれたのである。

[4]「確かに、弱さのゆえに十字架につけられましたが、神の力のゆえに生きておられます。私たちもキリストにあって弱い者ですが、あなたがたに対する神の力のゆえに、キリストとともに生きているのです」

キリストは私たち人間の罪の贖いをするために人となってこの地上に来られ、肉体を持つ人間としての弱さをもって生きられた。しかし、その弱さゆえの十字架の死によって私たちに救いの道が開かれた。これこそ神のはかり知れない救いの御計画であった。→ピリピ2:6~8 キリストにあって生きているパウロも人間としての弱さを持っている。しかし、神の力のゆえにキリストとともに力強く生きているのである。そしてその神の力、神の権威をもって、今パウロはコリント人たちに対処しようとしている。

[5-6]「あなたがたは、信仰に立っているかどうか、自分自身をためし、また、吟味しなさい。それとも、あなたがたのうちにはイエス・キリストがおられることを、自分で認めないのですか——あなたがたがそれに不適合であれば別です。——しかし、私たちは不適合でないことを、あなたがたが悟るように私は望んでいます」

パウロはここで彼らに信仰に立っているかどうか自分自身をためし吟味せよと迫る。5節後半のことばは、「あれほど明確にイエス・キリストを信じたあなたが

たが不適格であろうはずがない」との思いを込めて語られたのであろう。そしてまたパウロたちが信仰に立ち、キリストにあって生きており、不適格な者、にせ使徒ではないことを彼らは悟るべきである。そのことをパウロは望んでいる。

[7]パウロはここでコリント教会の人々が、「どんな悪をも行わないように」と神に熱心に祈っている。彼は自分たちが本当の使徒として受け入れられることを望むだけでなく、さらに進んで、彼らがあらゆる罪から離れて積極的に良い行い、正しい行いをするのを願うのである。しかし、それはあくまでも彼ら自身のためであって、このことによってパウロたちが使徒として適格であることが明らかにされるのが目標ではない。パウロは彼らに真に健全な信仰生活を送ってもらいたいのである。

[8]ここで言われている「真理」とは福音の真理のことであり、神のみこころとも理解できる。つまり、コリント人たちが神のみこころに従い正しい行いをしている場合には、私たちは何もすることができない。しかし、反対に彼らが神のみこころに逆らって悪を行っているような場合には真理のために何でもできる。コリント人たちが裁き、処罰することもできるという意味であろう。コリント人たちが真理に立つか否かによって、パウロがどのような行動に出なければならないかが定まることになる。

[9]「私たちは、自分は弱くてもあなたがたが強ければ、喜ぶのです。私たちはあなたがたが完全な者になることを祈っています」

この箇所は7節で言われていることと同様の内容である。パウロの願いはあくまでもここにある。ここで言われている「完全な者」とは「十分に成長した健全な者」という意味。

[10]「そういうわけで、離れていてこれらのことを書いているのは、私が行ったとき、主が私に授けてくださった権威を用いて、きびしい処置をとることのないようにするためです。この権威が与えられたのは築き上げるためであって、倒すためではないのです」

パウロが今まで書いてきたことは、この10節にあるように、彼がコリントへ行ったときに、主からの権威によって厳しい処置を取ることのないようにするためであった。彼がこの権威を与えられているのは、人を罰し、倒すためではなく、人を向上させ、成長させ、キリストのからだとして築き上げるためであった。コリント人たちはこのことをよく理解し、悔い改めて堅く信仰に立っててもらいたいと彼は願っている。彼はそのためにこの手紙を書いているのである。